



Column

日韓農業の小異

會田 陽久

日本と韓国は、位置の近さと共に気候条件に極端な差がなく、人口1人当たりの耕地面積は共に狭く、比較的類似性の強い農業を営んできた。研究の場面でも、この共通性を分析したり、相違点を見つけだし検討するといった作業がなされている。

こういったことから離れて、研究とは少し別の観点で、両国の農業に関連して気のついた相違といったものを紹介してみる。ある一定の年齢の女性に関心を持つ韓国とは大分異なる話ではあるが、FTA 交渉も進む昨今どこかで遭遇することがあるかもしれない。

先日、東京で北東アジア農政研究フォーラムの国際シンポジウムが開かれた。日中韓3カ国の研究者が自国語で書いた論文を自国語で報告するので、専門の通訳者が入って進化した。運営の円滑化のため事前に通訳の人たちから術語について質問を受けたが、普段分かっていても改めて質問されると両国で使う術語は漢字語を通してほとんど同じことに気づかされる。

アジア諸国の中で近代化において先発したわが国が、欧米の学問、文化を輸入するに当たり、概念、用語といったものに既存の漢字語を当てはめたり、新しい漢字語を作ったりしてきた帰結といえよう。しかし、それ以前から使われてきた言葉については歴然とした相違がある場合が多い。田と畑について質問されたとき、両国での相違に思い至った。たんぼとはたけを区別するためにわが国では、畑という国字を作ったが、韓国では、水と田を上下にくっつけて一つの漢字を作り、これで水田を表し、田と表記するとはたけを意味

することとなった。この水田を意味する漢字は、tap に近い発音をする。以前、日中韓の3カ国語に通じている中国人に聞いたことがあるが、この文字は韓国の国字で間違いないようである。

同様に、作物の名称も伝統的なものや移入された時期が比較的古いものについては、両国語で類似性を見いだせることはほとんどない。ほぼ同じ名称を使っているのは、比較的新しい時期に流入したもので、トマト、バナナなど外来語をそのまま使っている場合である。

しかし、その中でも例外はある。韓チリFTA が締結され、国内農業への対応施策が発表された時、生鮮果実の輸出国であるチリとの締結であるので果実作への対応施策が重点項目の一つであった。ブドウなどと並んで、チャムダレという名称があった。文脈から見て果物の名前とは分かるが、何のことかと首をひねってしまった。タレというはサルナシのことであるが、まさか施策上の重点品目になり得るはずはない。食品需給表をひもといてチャムダレの項目を見ると英語表記が、gooseberry となっていた。これがまた謎に拍車をかけた。グーズベリーといえ、日本ではシグレまたはスグリであり野生種の植物でますます農政の対象品目とは考えにくい。結局、インターネットで調べてもらったところ国産のキウイフルーツのことと判明した。別にキウイという品目名も農業関係で普通に使っているの、国産と外国産を区別する便宜のために使い分けしているのだろう。端から見ると随分大胆な行為にも思える。

他には、グレープフルーツを辞書で引くとそのままハングル表記されているが、実際にはジャーモンと呼ばれているようである。語源はよく分からない。先日のシンポジウムの後の現地見学会のおり、昼食のデザートにグレープフルーツを切ったものが出た。韓国人研究者からこれは何かと聞かれたので、ジャーモンと答えたが、ついでにこちらから語源を聞いてみた。たぶん漢字語だろうという以上には明確な答えはなかった。

似ているようでも多くの違いに気づかされるたびにやはり外国だと思ふ次第である。